

2008年度の危害情報システムにみる危害・危険情報の概要

この概要は2008年度に、国民生活センターと消費生活センターを結ぶ「全国消費生活情報ネットワーク・システム（PIO-NET：パイオネット）」によって収集した危害・危険情報と、協力病院から収集した危害情報の概要をまとめたものである（対象データは、2009年5月末日までに国民生活センターのホストコンピュータに登録された情報。なお、危害・危険情報は、2007年度から国民生活センターに寄せられた「経由相談」を除いている）。

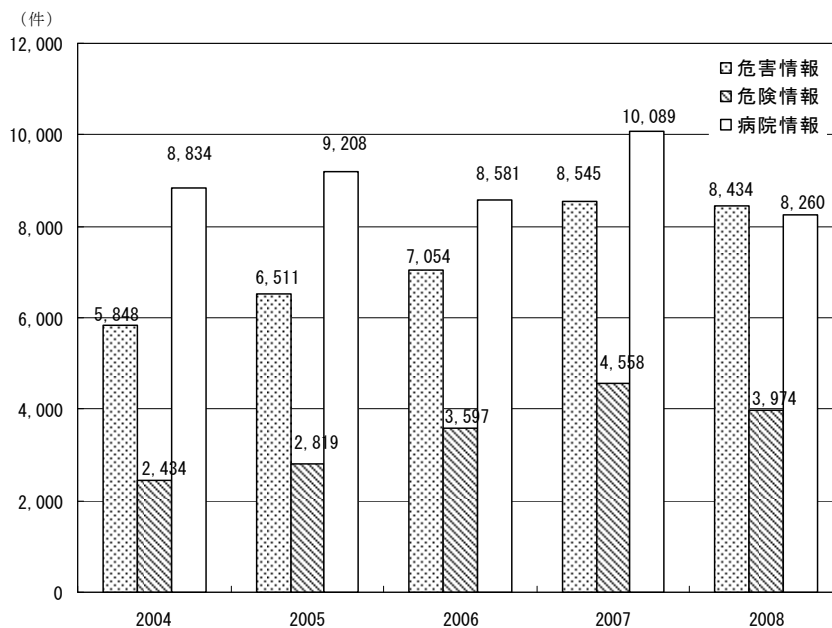
当該情報の詳細については、「消費生活年報2009」（2009年10月発行予定）に掲載予定である。

1. 主な特徴

- 2008年度に消費生活センターと協力病院から収集した件数の合計は20,668件で、対前年度比で見ると10.9%減であった。「危害情報^{注1}」「危険情報^{注2}」の減少の主な要因としては、前年度は中国産冷凍食品等の影響で「調理食品」の件数が非常に多かったことが挙げられる。
- 2008年度は消費生活センターから12,408件（前年度：13,103件）の情報を収集した。内訳は「危害情報」が8,434件、「危険情報」が3,974件であった。「危害情報」上位3商品は、「化粧品類」「医療サービス」「エステティックサービス」であった。「危険情報」上位3商品は、「自動車」「ストーブ」「電子レンジ類」であった。
- 協力病院からは、8,260件（前年度：10,089件）の危害情報を収集した。上位3商品は、「階段」「自転車」「包丁」であった。

注1：生命や身体に危害を受けた情報 注2：危害には至っていないが、そのおそれがある情報

図1. 危害・危険情報収集件数の推移



注：2009年5月末日までの登録分。

2. 消費生活センター編

「危害情報」の概要

2008年度に消費生活センターから収集した「危害情報」は8,434件であった（2007年度：8,545件）。

（1）商品等分類別件数

医療サービス、エステティックサービス、美容院等の「保健・福祉サービス」が最も多く、1,904件（22.6%）であった。次いで、健康食品、調理食品、飲料等の「食料品」1,902件（22.6%）、化粧品類、家庭用電気治療器具、保健衛生品その他等の「保健衛生品」1,318件（15.6%）で、以下、ふとん類、椅子類、ベッド類等の「住居品」956件（11.3%）、靴、婦人洋服、婦人下着等の「被服品」492件（5.8%）となっている。

前年度と比較すると、1位の「保健・福祉サービス」から4位の「住居品」までは順位に変化はない。5位の「被服品」は131件増え、7位から上昇した。

（2）商品・役務別件数

「化粧品類」が615件（7.3%）で最も多く、次いで「医療サービス」577件（6.8%）、「エステティックサービス」520件（6.2%）、の順であった。その割合を前年度と比べてみると、1位の「化粧品類」は0.1ポイント増、2位の「医療サービス」は0.6ポイント減、3位「エステティックサービス」は1.2ポイント減少している。

4位は前年度と同様「健康食品」で460件（5.5%）、5位は「外食」で356件（4.2%）であった。

（3）危害の内容

「その他の傷病及び諸症状^{注3}」が2,307件（27.4%）と最も多かった。内容をみると、「医療サービス」「歯科治療」「健康食品」等によって体調がすぐれない、気分が悪い、痛みがあるなどという症状が起きたものが含まれていた。前年度に比べ101.3%と増加し、危害全体に占める割合も0.8ポイントの増加となっている。

次いで多かったのは、「皮膚障害」の1,984件（23.5%）で、「化粧品類」「エステティックサービス」「医療サービス」等によるものが多かった。

3位は前年度と同様「消化器障害」の1,190件（14.1%）であった。「健康食品」「調理食品」「外食」によるものが多。

注3：「その他の傷病及び諸症状」には、脱毛、頭痛、精神不安定等、根本的な原因が明らかでないものが含まれる。

「危険情報」の概要

2008年度に収集した「危険情報」は3,974件であった（2007年度：4,558件）。

（1）商品等分類別件数

ストーブ、電子レンジ類、電気洗濯機等の「住居品」が最も多く1,556件（39.2%）。以下、自動車、自動二輪車、ベビーカー等の「車両・乗り物」865件（21.8%）、テレビ、携帯電話機、パソコン等の「教養娯楽品」443件（11.1%）、菓子類、調理食品、酒類等の「食料品」405件（10.2%）と続いた。前年度に比べ、全体的に減少している。

（2）商品・役務別件数

「自動車」が574件（14.4%）と前年度に引き続き最も多かった。前年度に比べ、件数が194件、割合が2.4ポイント減少したが、全体に占める割合は依然として多い傾向である。

2位の「ストーブ」285件（7.2%）は、前年度に比べ89件増加したが、3位の「電子レンジ類」131件（3.3%）は19件減少している。4位の「テレビ」95件（2.4%）も42件減少した。

(3) 危険の内容

「発煙・火花」が最も多く621件(15.6%)で、「テレビ」「ストーブ」「電子レンジ類」などによるものが目立つ。2位は「過熱・こげる」458件(11.5%)で、「携帯電話機」「ストーブ」「自動車」の順に多い。3位は「機能故障」436件(11.0%)で、「自動車」「自動二輪車」「修理サービス」が多い。4位は「発火・引火」407件(10.2%)で、「電子レンジ類」「ストーブ」「自動車」の順に多かった。

3. 病院編

2008年度に危害情報収集協力病院(20病院)から収集した「危害情報」は8,260件であった(2007年度:10,089件)。

(1) 商品等分類別、商品・役務別危害件数

事故の原因となったものを商品等分類別にみると、上位3位は、包丁、机・テーブル類、椅子類等の「住居品」2,643件(32.0%)、階段、ドア、床等の「土地・建物・設備」2,284件(27.7%)、遊具、他の文具・事務用品、園芸用品等の「教養娯楽品」1,301件(15.8%)であった。

商品・役務別にみると、上位3位は「階段」752件(9.1%)、「自転車」512件(6.2%)、「包丁」382件(4.6%)となっている。

(2) 当事者の性別・年代

10歳未満が3,441件と全体の41.7%を占めた。中でも0~2歳の乳幼児は1,780件(21.5%)で最も多かった。10歳代の691件(8.4%)と合わせると、20歳未満で全体の約半数を占める。なお、20歳代は667件(8.1%)であった。

性別では、男性4,426件(53.6%)、女性3,834件(46.4%)で男性が多かった。年代別にみると、20歳代までは男性が多く、30歳代以降は概ね女性が多くなる傾向にあった。

(3) 危害の程度

軽傷(入院を要さない傷病)が7,583件(91.8%)と最も多く、以下、中等症(生命に危険はないが、入院を要する状態)が629件(7.6%)、重症(生命に危険が及ぶ可能性が高い状態)が29件(0.4%)、重篤症(生命に危機が迫っている状態)が3件(0.0%)であった。なお、死亡は16件(0.2%)であった。

(4) 危害内容別商品

「打撲傷・挫傷」(3,040件)では「階段」が442件(14.5%)で最も多く、「自転車」275件(9.0%)、「自動車」168件(5.5%)などが続いた。「刺傷・切傷」(2,187件)では「包丁」376件(17.2%)の他、カッターナイフなどの「他の文具・事務用品」124件(5.7%)や、「食器」120件(5.5%)などもあった。「熱傷」(871件)は「湯」が98件(11.3%)と多く、また、「骨折」(830件)は「階段」119件(14.3%)、「自転車」93件(11.2%)、「床」70件(8.4%)などが多かった。「異物の侵入」(456件)は主に誤飲の事故であるが、「タバコ」が76件(16.7%)と多かった。

<本件連絡先>

独立行政法人 国民生活センター
相談部危害情報室
電話：03-3443-6223

別 添

<参考資料 上位3商品・役務の概要>

1. 消費生活センター編

「危害情報」

①化粧品類 (615件)

化粧品類は615件で、全体に占める割合は7.3%であり、前年度より件数が4件、割合が0.1ポイント増加し、順位も2つ上がっている。性別では、女性が551件(89.6%)と多かった。年代別では、30歳代と50歳代が108件(17.6%)で最も多く、以下40歳代104件(16.9%)、60歳代91件(14.8%)と続く。化粧品類の内訳をみると「化粧クリーム」109件(17.7%)が最も多く、次いで、「化粧品セット」80件(13.0%)、「基礎化粧品全般」71件(11.5%)であった。前年度と比べ「化粧クリーム」の割合が高まっている。危害内容は、「皮膚障害」が518件(84.2%)と全体の8割以上を占め、次いで「その他の傷病及び諸症状」70件(11.4%)の順であった。

②医療サービス (577件)

医療サービスは577件(6.8%)で、前年度より全体に占める割合が0.6ポイント減少したが、順位は変わっていない。性別をみると、女性が420件(72.8%)と多かった。年代別では、30歳代が121件(21.0%)で最も多く、次いで20歳代83件(14.4%)、60歳代75件(13.0%)の順である。危害内容は「その他の傷病及び諸症状」が259件(44.9%)で最も多く、次いで「皮膚障害」134件(23.2%)、「熱傷」55件(9.5%)の順であった。

③エステティックサービス (520件)

エステティックサービスは520件で、全体に占める割合は6.2%であり、前年度より1.2ポイント減で、順位も2つ下がった。性別では、ほとんどが女性で497件(95.6%)である。年代別では20歳代が193件(37.1%)、次いで30歳代が164件(31.5%)で、両方で全体の6割以上を占める。危害内容は、「皮膚障害」230件(44.2%)が最も多く、次いで「熱傷」152件(29.2%)であった。

表1. 危害発生件数上位5商品・役務の推移 (消費生活センター)

順位	2006年度 7,054件			2007年度 8,545件			2008年度 8,434件		
	商品・役務	件数	割合(%)	商品・役務	件数	割合(%)	商品・役務	件数	割合(%)
1	エステティックサービス	646	9.2	エステティックサービス	633	7.4	化粧品類	615	7.3
2	健康食品	547	7.8	医療サービス	632	7.4	医療サービス	577	6.8
3	医療サービス	543	7.7	化粧品類	611	7.2	エステティックサービス	520	6.2
4	化粧品類	484	6.9	健康食品	509	6.0	健康食品	460	5.5
5	外食	261	3.7	調理食品	390	4.6	外食	356	4.2

表2. 危害内容別上位5位 (消費生活センター)

順位	2006年度 7,054件			2007年度 8,545件			2008年度 8,434件		
	危害内容	件数	割合(%)	危害内容	件数	割合(%)	危害内容	件数	割合(%)
1	その他の傷病及び諸症状	1,922	27.2	その他の傷病及び諸症状	2,277	26.6	その他の傷病及び諸症状	2,307	27.4
2	皮膚障害	1,779	25.2	皮膚障害	2,017	23.6	皮膚障害	1,984	23.5
3	消化器障害	686	9.7	消化器障害	1,098	12.8	消化器障害	1,190	14.1
4	熱傷	658	9.3	熱傷	763	8.9	熱傷	680	8.1
5	刺傷・切傷	526	7.5	刺傷・切傷	675	7.9	刺傷・切傷	597	7.1

「危険情報」

①自動車 (574件)

「自動車」574件の危険内容をみると、最も多いのは早期故障や故障頻発などの「機能故障」の283件(49.3%)で全体の半数近くを占める。以下、「破損・折損」69件(12.0%)、「発煙・火花」43件(7.5%)と続いた。

②ストーブ (285件)

「ストーブ」(285件)の危険内容をみると、「その他」91件(31.9%)が最も多い。そのほとんどはハログ

ンヒーターのリコールに関するもので、「製品の不具合が目立つハロゲンヒーター(平成20年11月19日公表)」の反響によるものと思われる。以下、「発煙・火花」55件(19.3%)、「発火・引火」44件(15.4%)と続いた。

③電子レンジ類(131件)

「電子レンジ類」(131件)の危険内容は、「発煙・火花」46件(35.1%)と「発火・引火」45件(34.4%)で約7割を占めた。

表3. 危険発生件数上位5商品・役務の推移(消費生活センター)

順位	2006年度 3,597件			2007年度 4,558件			2008年度 3,974件		
	商品・役務	件数	割合(%)	商品・役務	件数	割合(%)	商品・役務	件数	割合(%)
1	自動車	946	26.3	自動車	768	16.8	自動車	574	14.4
2	ストーブ	205	5.7	ストーブ	196	4.3	ストーブ	285	7.2
3	自動二輪車	104	2.9	調理食品	165	3.6	電子レンジ類	131	3.3
4	修理サービス	88	2.4	電子レンジ類	150	3.3	テレビ	95	2.4
5	石油ファンヒーター	85	2.4	テレビ	137	3.0	菓子類	84	2.1

表4. 危険内容別上位5位(消費生活センター)

順位	2006年度 3,597件			2007年度 4,558件			2008年度 3,974件		
	危険内容	件数	割合(%)	危険内容	件数	割合(%)	危険内容	件数	割合(%)
1	機能故障	809	22.5	機能故障	662	14.5	発煙・火花	621	15.6
2	発煙・火花	437	12.1	発煙・火花	643	14.1	過熱・こげる	458	11.5
3	過熱・こげる	365	10.1	過熱・こげる	577	12.7	機能故障	436	11.0
4	発火・引火	346	9.6	発火・引火	477	10.5	発火・引火	407	10.2
5	破損・折損	335	9.3	破損・折損	401	8.8	異物の混入	403	10.1

2. 病院編

① 階段(752件)

年代は10歳未満が285件で最も多く、全体の37.9%を占めた。中でも0~2歳が171件で突出して多かった。10歳未満に次いで多いのは70歳代の77件(10.2%)、60歳代の70件(9.3%)となっていた。危険内容は「打撲傷・挫傷」が442件(58.8%)で最も多く、次いで「骨折」119件(15.8%)で、「打撲傷・挫傷」「骨折」で全体の74.6%を占めた。以降「刺傷・切傷」89件(11.8%)が続いた。

② 自転車(512件)

10歳未満の169件(33.0%)が最も多く、次いで10歳代103件(20.1%)であり、20歳未満が半数以上を占めた。危険内容は「打撲傷・挫傷」が275件(53.7%)、次いで「骨折」93件(18.2%)、「擦過傷」52件(10.2%)であった。

③ 包丁(382件)

30歳代が88件(23.0%)、次いで20歳代が74件(19.4%)であった。20~30歳代で全体の42.4%となり、ほぼ半数を占めていた。危険内容は「刺傷・切傷」が376件(98.4%)と圧倒的多数を占めていた。

表5. 危害発生件数上位5商品・役務の推移(病院)

順位	2006年度 8,581件			2007年度 10,089件			2008年度 8,260件		
	商品・役務	件数	割合(%)	商品・役務	件数	割合(%)	商品・役務	件数	割合(%)
1	階段	759	8.8	階段	952	9.4	階段	752	9.1
2	自転車	517	6.0	自転車	684	6.8	自転車	512	6.2
3	包丁	305	3.6	包丁	426	4.2	包丁	382	4.6
4	ドア	304	3.5	遊具	409	4.1	机・テーブル類	281	3.4
5	自動車	295	3.4	椅子類	340	3.4	遊具	275	3.3